

## 世界の人々が歩く理由 —遍路道の小さなゲストハウスから—

鷺野陽子 (Tentsuki place ゲストハウス 女将)

### Why People Around the World Walk? —A Small Guesthouse on the Shikoku Pilgrimage Path Yoko WASHINO, Owner of Tentsuki Place Guesthouse

At the mid-point of the eighty-eight sacred sites along the Shikoku pilgrimage route on the road to the last pass leading to Temple no. 44 Daihōji, there is a rock where it is said that Kōbō Daishi stepped his feet in frustration when he was stranded due to extremely deep snow. At the foot of Hiwada Pass, which runs from the former Ozu domain's guardhouse to the Matsuyama domain's territory, I started a guesthouse called Tentsuki Place in 2018. It was a time when inbound tourism was very active and there were a lot of travelers from overseas. Until the new coronavirus scare restricted travel, about forty pilgrims from overseas stayed at the guesthouse. I wonder, "Why do people walk the Shikoku pilgrimage route?" I am interested in the spirit of those who spend money, physical strength, and time to walk to a small island in a distant foreign country. Where does this extraordinary determination come from, and how does it change after the walk? Most of the international guests were willing to talk when I asked them and I am grateful to everyone who shared their precious experiences and thoughts with me in the small guesthouse along the way. We still keep in touch with each other and I sometimes ask them about their feelings afterwards. The records of people who are thinking about life, searching for ways to live, living as human beings, coexisting with nature, and engaging with society are all written down in my guesthouse notebook. In this paper, I would like to introduce these precious stories and pass on the culture of pilgrimage hospitality and lodging as a source of spiritual "food" for those of us on the receiving end. There is much to learn from the stories of these pilgrims who spend an average of forty-five days walking the pilgrimage path on a foreign island.

#### はじめに

四国霊場88か所のちょうど真ん中、44番札所に至る最後の峠に向かう道には、あまりの雪の深さに立ち往生した御大師様が地団駄を踏んだとされる岩が残っている。旧大洲藩の番所から、松山藩領に抜けるひわだ峠麓に2018年、民泊でゲストハウスを始めた。インバウンド観光が活発に動き出した時期にもあたり、海外からの旅行者が非常に多く、新型コロナウイルス騒ぎで旅が制限されるまでの間、海外からの宿泊客のうちお遍路さんはこれまでに約40人余り。人はなぜ四国巡礼の道を歩くのか？

相応の資金と体力、それに時間を費やして遠い異国の小さな島を歩く人たちの、その心に関心があった。並々ならぬ決心はどこから来るのか、またそれは果たして歩いた後どう変化するのか。私が尋ねるとほとんどの方は快く話してくれた。旅の途中の小さなゲストハウスで貴重な経験や思いを伝えてくださった皆さんに感謝している。今も交流が続いていて、その後の心模様を聞くこともある。人生について考え、生き方を模索し、人間として生きることや自然との共存、社会とのかかわりを模索する人たちの記録は、すべて私のノートに書き溜めてある。本稿ではそれらの貴重なストーリーたちを紹介し、私達受け入れる側も心の糧としてお遍路のお接待、お宿文化を継承したい。異国の島の巡礼の道を平均45日間歩く彼らのストーリーから学ぶことは多い。なお、本稿において、彼らの言葉を日本語に訳したのは鷺野天音と筆者である。

## 1 ゲストハウスTentsuki Place概要

2017年に民泊を申請して運営している。新型コロナウイルス禍に入った2020年春まではインバウンド観光で主要都市観光に飽きた海外からの宿泊が多かった。44番札所のある久万高原町までひわだ峠を越えて徒歩約1時間の距離にある。43番明石寺からは約75キロあるため、歩いて2, 3日の距離に位置する。民泊サイトAirbnbに登録しているの、当時のインバウンド増加の波にも乗り、口コミで海外からの来客が増えていった。

### どんな人が遍路しているのか？

◆2019年（コロナ前年）日本人149人、海外からの方57人（内訳：①中国・香港 ②オーストラリア／ドイツ／フランス／UK／カナダ／台湾 ③USA他メキシコ／スリランカ／オランダ／オランダ／イタリア／スペインなど）。そのうち海外からのお遍路さん約30人。年齢：20代～70代 ◆2020年1月から2月新型コロナウイルス前夜までお遍路さん4名（海外3名） ◆2021年10月末現在まで日本人45人、在留資格のある海外の方2名、そのうちお遍路さん2名。（いずれも日本人）平均滞在期間1～3日 ◆その他wwoofで滞在（すべて海外から参加。年間20人ほど）\*お遍路で来て、そのまま滞在し活動を手伝っていくこともよくある。 ◆口コミ：インターネットの情報や、旅人の口コミで来られる方も多。平均滞在期間：1週間～3か月 wwoofしながらお遍路を回る若者も多い。

### wwoofとは？

様々な人と友達になり、その関係性を深化させ、オーガニック生活を知り、新しい知見を得て、価値観の多様性を感じ、自分を向上させていくものです。家族のような気持ちで、何をしたら相手が喜んでくれるかをお互いが念頭に置きながら一緒に短い間生活します。「食事・宿泊場所」と「力」そして「知識・経験」を交換します。自分が持っているものをあげ、持っていないものをもらうというとてもシンプルなくみです。その関係に、お金のやりとりは一切ありません。単なる交換ではなく、WWOOFではホストとウーファーとの温かなコミュニケーションを大切にしています。（wwoof Japanサイトより）

### Airbnbとは？

Airbnb（エアビーアンドビー）は、泊まる場所を探す旅行者と、空き家・空き部屋を貸したい人をつなぐオンラインサービスです。アメリカ、サンフランシスコ発祥。世界191カ国・地域の6万5000都市で計300万件以上の物件を掲載しており、通算1億5000万人以上が利用している（Airbnbサイトより）バックパッカーはじめ、国内海外を問わず年齢も幅広く利用する人が多い。

### お遍路ハウス88とは？

ニートや引きこもり支援をする認定NPO法人ニュースタートが運営するサイトです。「お遍路ハウス四国88」はグローバルお遍路時代に、外国人と日本の若者にお遍路宿を提供し、お遍路文化を守り育てる「心の事業」です。世界各国の若者たちが交流できるお遍路ハウスは、世界平和の基地です。利用しやすく、安価で、一人旅でも安心な宿の提供を目指しています。会員制です。会員登録は無料です。お遍路ハウスを利用する人は、同宿して人生を考え直す仲間です。（HPより）

Tentsuki Place Guest house 〒791-1222 愛媛県上浮穴郡久万高原町二名乙787-13

電話／Fax 0892-21-8076

## 2 Tentsuki Placeのある、由良野の森について

2003年、松山で内科医をしていた清水秀明医師が、農協所有の元桑園を手に入れたところから【由良野の森】は始まった。2000年「病院で死ぬということ」が医療関係者だけでなく社会で取り扱われ始めたころ医師をしていた清水は松山で仏教と医療を考える会にいた。丁度、介護保険が始まった時のこと。年老いていく人を支える（介護）については、多くの人がかかわることになり進むだろうと考えた彼は、では人はどうすれば幸せに生きることができるのか？自分はどこにかかわるのかを考えた。

死ぬ前になってからではなく、生きている間に幸せを感じることができる。世知辛い世の中で、自由に安心して体験を享受できる自然の中に人を放ちたい。ちょうど見ていたテレビの画面。放牧された牛が幸せそうに木々の間から草を食み顔を出す場面にヒントを得た彼は、由良野の森の舞台となる土地を手に入れた。

（ほっとしてハッとす）人と自然のかかわりの中から相互依存、共存する関係を体験できるような場。

2003年、木を植え始めたのが由良野の森の始まりでした。子どもたちの自然体験活動や、音楽会、出会いの場としても展開。個人の体験がもたらす自然観や世界観など何かが変わるかもしれないことが主願で自然保護活動としてではなかった。2017年特定非営利活動法人に。主に里山で活動していた私たちが、その奥の山が荒れていると気づいたのはこの頃。次世代にブナの森に象徴されるような（多様性のある森）を取り戻したい。以来、会員数150余。運営ミーティングを毎月行い、たくさんの人たちのかかわりを得てブナの森プロジェクトを柱に活動を続けている。関心のある方は是非ホームページをのぞいていただきたい。

由良野の森ウェブサイト <https://yuranonomori.jp/>

### 3 お遍路さんたちのはなし Stories of pilgrimage

#### (1)自分探しの旅

##### マイケル：アメリカより初めて受け入れた外国人遍路

日本は山々とそれを覆う森。それに表情を変える四季。その間を流れる水だ。僕は日本を訪れ、ここに来た。6年前のことだ。今度は僕があなたに伝える番だ。ここでたくさんを知った。都市と自然。孤独とコミュニティー。平和とアクション。前に進むことと、手放すこと。由良野は「世界を見る方法」を教えてくれる。今まで先祖がどう生きてきたか。そして私たちはこれからどう生きるべきか。四国の遍路の道が通るここで。僕は「僕」を知った。あなたには何が見えるのだろうか。僕は小さな存在で、「由良野」を紐ぐ糸の一人。これは僕の言葉ではない。僕が由良野について話すとき、「それ」は僕を通して話しかける。僕が紡ぐのは彼ら全員の言葉だ。奪うと何かを失い。与えると何かを受け取る。どんな小さなことでも。あらゆる人と場所。すべての言葉と行動には、意味がある。「由良野」は自然、社会、そして私たちが共にあろうとする未来への「きっかけ」。すべては繋がっているのだ。みんなどこかに行こうとしている。でもどこへ行けばいいのだろうか。行き詰ってしまう。僕も今だになぜここに導かれたのかわからない。「運命」というと少し違うけど。偶然を超えた何かがあって。ただここで、ずっと探し続けていた「バランス」を見つけたんだ。その平和に境界はなく、誰かに管理されているわけでもなかった。平和って、自然にやってくるもので、そしてみんなと分かち合うもの。完璧なんてこの世にはないかもしれないけど善はある。見つけるためには、与えればいい。信じて。「由良野」が僕に教えてくれたこと。準備ができるまで待たなくていい。行って。「あなた」を探そう。

#### (2)熟年世代の旅～引退後、やっておきたかったこと～

##### イングリット&ブルーノ：ドイツより友人同士の旅

日本に来たのは初めての二人。母国ドイツから一番遠い文化の国だと思い選んだ。東京や、京都など主要なザ・日本を観光した後四国にわたり、初めて巡礼の道があることを知る。体力的にはしんどいので全部は歩かないで交通機関も利用しての旅。(日本の印象は?)・丁寧。親切。みんなが笑顔で接客し、丁寧にあいさつする。それが商業的でなく、本当に誠実な感じがして驚いている。どういう教育なのか知りたい。母国ではありえず信じられない。・神社や仏閣に若い人も来ている。祭りだけでなく、人が神社に行ったり、寺参りをしているのはなぜなのか?礼拝はないのか?なぜ神社仏閣に行くのだろうか。不思議な民だね。神社も寺もいつもきれいに清掃もされている。それも驚きだ。日本人は清潔好きだと感じる。

#### (3)若き探究者たち～世界を旅する途中で東洋の異国を歩く～

##### ジェリー：ベルギーから (音楽家)

インドを経て世界を歩く旅の途中で日本にたどり着く。歩くのが好きなので、遍路道にかかわらずどの国も歩いて旅している。日本は特に都会や観光地のあるような街より、田舎に面白みを感じている。文化(都会の日本とは)も違うと感ずる。歩くと頭が静かになっていい。仏教に関心がある。姿勢を正すことができる。(彼はいつも姿勢正しく座っていた)子供のころだったらとゲームしている子供だった。体も壊し、精神的にもよくなかった。うまく自分の思いを伝えることがむづかしいとずっと感じていたが、音楽と出会って詩を書いたりして自分を認められるようになった。旅をして人と出会うの

は大事。歩き遍路はいい旅だと思う。ゆっくり出会いを経験できる宿は大きなファクター。宿（場）の在り方は旅を左右する。

#### ダニエル：イタリアから（旅行業界のガイド）

イタリア人らしく陽気でユーモアのある人。「本当の何か」を探して遍路の旅をしている。四国は何かすごいもの、本当につながる何かを内包していると感じて歩いている。この島は、人々は記憶にないのかもしれないが、古い歴史と物語がある。それは大事なものだと思う。（土地）（人）に惹かれる。日本人は気が付いていないけど、日本の良さを大事にしたほうがいい。奥ゆかしさ。派手に表現しなくてわかるすごさ。謙虚さ。笑顔。日本語の音。イタリアでは人は良く（LOVE）を表現するし歌ったり口にするけどそれは本当の愛とは違うと思って探している。その時、一時のものではない。愛って何かを探している。

道々、畑をしている老人が日本語で話してくれる。笑顔がいい。わからないけど挨拶する。気持ちいい。旅をしていて心地よい交流がある。わざとではない笑顔。奉仕の心。上っ面ではない素朴な愛。挨拶や奉仕が綿々と生きてる遍路道、仏教、弘法大師を学んでいる。学びたい。全くの異国、自国と違う国を歩くことができる。アジアでも日本は独特の国。ヨーロッパとはもちろん全然違うがアジアでもない感じ。

#### アンテネーラ：スペインから（元モデル）

自国でモデルをやっていたが、事故に遭いすべてのことをなくした。キャリアも継続できなくなり、スペイン巡礼をした時に日本の遍路について聞いたのがきっかけ。すべてなくし人生を悲観して歩き続けてここ（日本）までたどり着いた。

#### ヴィンセントとジェイ：メキシコとUSAから（学生）

古い師に（海を渡り、東洋の島でお坊さんになる）イメージが見えるといわれ以前から関心のあった日本に来た。ワーキングホリデービザを利用して1年間滞在予定。

#### フランスから来た21歳。日本のアニメが好きで、アニメとともに育った世代。

ドラゴンボールと鬼滅の刃が好き日本語は話せなかったが、アニメのセリフは流ちょうな日本語で言える。アニメの世界観が日本にあると思ってきたが、都会では見つけにくいので四国に来た。遍路道のこととは四国に来てから知った。四国の田舎道やお寺はアニメにある日本の世界を旅している気分。

#### ドイツから壮年の熟考の旅人、人生の岐路に立つ。

大きな挫折と喪失を経て、仕事を辞め四国遍路を歩くため日本に来た。日本は初めて。歩いていると悟れたり、楽になったりするわけではなかった。同じ遍路をする人同士でも気が合えば話もするが、自分の問題はいつもブーメランのように戻ってきて離れたりしないから。

（由良野の森に来て、もう一度ここに戻ってこようと思った理由）森を取り戻す活動や、子供たちのサポート活動など自分も参加して手伝った。いろんなことを一緒にするうちに心が救われる思いがした。

歩いていると、こんな風にほどけたことはなくて本当にうれしい。いろいろあるが、また（人生を）歩き始めようと思う。

#### Nさん（日本人女性）：仕事に行き詰まり退職後旅に出た

ふと入ったうどん屋で見た白装束の遍路さんを見て（これだ）と思い旅に出た。歩いていると足がくたびれ、しんどすぎて無駄なことを考えられなくなるのがいい。考えがシンプルになる。その日の宿と道のりを計画して（頑張っている）の単純な繰り返しの毎日が大変だけど心地いい。余計なことばかりぐるぐるして解決してなかったことに気が付いた。

## I さん：兵役を終えたイスラエルの若者

18歳からの兵役が義務化されているイスラエルの若者が世界旅行に出るのは普通のことのように、たくさんさんの若者が来ていた。ヒッチハイクで森までやってきた一人。前線で戦った（国防した）若い兵士たちの中でも特に、精神的にも心理的にも苦痛、怒りや悲しみ、様々矛盾を抱えている様子で、滞在中もイライラしぶつかる様子が見えた。ほかの滞在者と接するうち私たちの勧めを受けて遍路に旅にでた。2週間ほどで、足を痛めて帰宅。宗教的にユダヤ教は一神教なので、仏教や神道とは相い入れないようだが、（遍路道を歩いての感想）はAmazing！（感動するほどすごい）だったらしい。人は親切でお接待というありえないサービス？ に驚き、皆が基本、「安全」なことになっていて当たり前安心して暮らす国民に驚愕していた。

## フランクソワ：フランス人。日本人より日本と遍路を知るサムライ

自国の大学でエコ・ツーリズムを専攻。日本のアニメや、小説などに親しみ宮本武蔵に傾倒。遍路道を奥の院や別格まで網羅し、歴史にも道にも詳しい。歩き遍路と自転車遍路合わせて4回。お寺公認のお先達を目指していたがこの度認められた。以下は質問に答えていただいた文章です。

Q：（あなたにとってお遍路の意味は何ですか？お遍路の神髄は何だと今感じていますか？遍路の道を歩いて気づいたこと、感じたこと、変わった自分がありますか？）

A：最近気づいたが、遍路は（現代）最後の安全な冒険だと思う。多くの人は自分について考える暇がない。人生はスマホと仕事、勉強とニュースで覆いつくされている。だから自分自身に聞く（何がしたいのか）（何が必要でほしいのか？）の答えに耳を傾けない。物語に出てくるヒーローは、大体居心地のいい場所から追い出されるか、意を決して出ていくかして旅に出てる。自分の場合はそれが宮本武蔵だった。武蔵が僕を遍路に押し出した。武蔵のように浪人になって自分自身を知りたかった。ホビットの冒険やジブリ映画でも学ぶことはできるかもだけど、いったんほんとに外に出たら、自分自身と向き合うしかない。いったい自分は何ができて、何が必要か。ほかの人や自然の大切さ、そしてその調和について。

みんな、自分が投げかけた質問に対する答えを道で見つける。誰かとても大事な人をなくした悲しみや、仕事のことを抱えて歩く。でもまた新しい人生が来る。安全な、といったのは（遍路道には）道しるべがあり、人がいてボランティアや食べ物、水もあるから。そんな安全な設定の中だから、人は心おきなく自分の心を空っぽにして深い探求に入れるのだと思う。遍路はそのための時間と場所を提供してくれる。ただただフルに生きるチャンス。より（自分らしい）自分を生きるため。この45日間くらいの間があれば、大概の人はなんて自分の人生って空っぽなんだろうと感じるだろう。夢だった仕事は、経済的な余裕をもたらすが、多くの邪魔が入る都会の喧騒の中、それがどんなに面白くないものか忘れさせている。自然から隔離され、人工的なライトに囲まれ時に太陽のことも忘れてしまう。そんな時遍路に出ると、この社会自体が病気がかかっている、不平等でバランスが悪く人工的だと気づくだろう。遍路を歩くと、本当に単純なことこそ（生きていくのに）一番大事だと気が付く。家族・友人。腹が減ったらたくさん食べる。疲れたらぐっすり眠る。一歩ずつゴール目指して歩を進める。一歩一歩。明日のためではなく今日、今のための一歩。

## Nさん：リトアニアから（小説家・教員・社会福祉士）

旅の向こうを探して遍路に出た。日本は2回目。四国は初上陸。遍路は以前から興味があった。遍路半ばで新型コロナウイルス騒ぎに巻き込まれ、tentsukiplaceで滞在。遍路を済ませたあと戻ってきて森の手伝いをしながら、出国を待った。帰国してからもずっと継続してメールなどでやり取りが続いているうちの一人。

以下は帰国後のメールより

Q：（なぜ遍路だった？）

A：人生の意味を探している。みんな、だから遍路を歩く。現代だと、それぞれ、夫／息子／作家／教師…いろんな役割を一人が演じている。お遍路さんになると一つだけの自分を生きることができ

る、レアな体験。これは日々の暮らしの中ではほぼ不可能な体験だと思う。

Q：(遍路前後で、あなたの中で変わりましたか?それは何ですか)

A：もちろん変わった。一番は(一人でいること)をもう恐れなくなったこと。

Q：(矛盾は前より複雑になったよね?コロナ以降)

A：もちろん。さらに、ずっと複雑になり続けている。

Q：(これから遍路に出る人に話すとしたら、遍路の何が一番インパクトあった?)

A：むつかしい質問だけど。遍路を始めたころは、必死で抵抗したと思う、いつもの生活に戻ろうとしたり、うちに帰ろうと試みるとかね。それがゆっくり(お遍路さん)になってくる。そして生きていくのに必要なことってほんの少しだって気づく。ヨーロッパの巡礼と違って遍路ではほとんど人に会わない。でもそれが(孤独に慣れる)唯一の方法だから良かったと思う。帰るのは不可能だっという時に tentsukiplace で君たちに出会ったのは迷子が家に帰れたようなギフトだった。都会で人の渦に巻き込まれているときと、四国でほとんど人に逢わずに歩いているのとは全く別人でいるくらい違う体験。いい意味でだれか違う人になる。自分に起こった変化を確認して残すために次の小説を書こうと思っている。

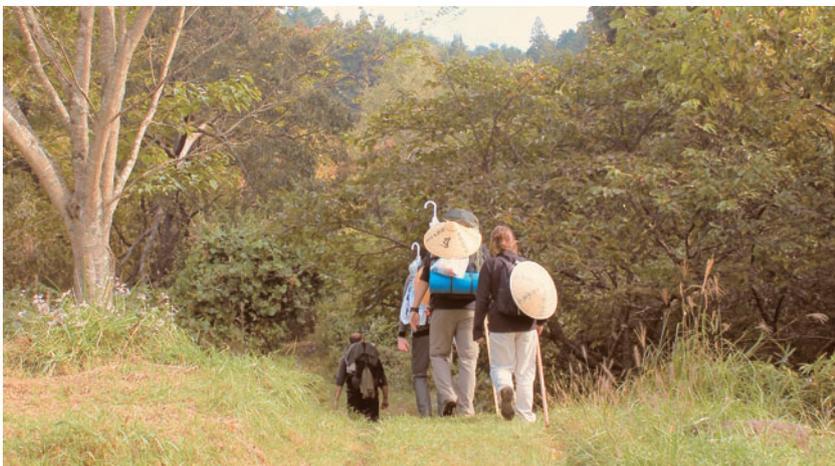
### Zさん：フランスから(金融関係)

世界を知り、社会的な問題解決をしている人やことを見るため世界を歩いている。仕事にもつながる greeninvestment に関心が深い。日本と日本人には、自分たちが今失ってしまって、これから早急に構築しようと躍起になっている持続可能な社会へのヒントがすでに生きている。日本人は無意識で、それに気づいておらず当たり前と思っている。実はそこにたどり着くのが至難の業な文化や民度を誇っている。しかし都会ではすでに急速にその特性を失おうとしているのが見えて悲しい。是非大事にしてもらいたい。海外からそれを感じ、個人的にも学びたいとこの島に遍路に来る外人は多いと思う。英語が通じて WIFI 環境のある所で現地の日本人と交流できることは貴重。遍路宿がなくなってきていると聞いたが、何とか残せるように経済的な対策も必要だと思う。

### おわりに

好奇心のままに、あるときは夜を通しての人生談義の中で、世界の人々が歩く理由を聞き取ってきたストーリーを共有した。巡礼の旅をまだ歩いたことはないけれど、今は四国の景色の一部になっている巡礼者の姿を少し違った視点で見えるようになった。町に、山の道にそして過疎になっていく村々の道に白装束の巡礼者の姿が戻ってきつつある。世の中が平穏であることを祈りたい。平和でなければ人は歩く旅をできないのだと気が付いたのはコロナ禍のおかげ、ともいえる。

遠い異国の地から(shikokubyou：四国病と彼らは呼ぶ)四国の道に戻りたいと熱烈なメールが届いている。それぞれの思いを運び、また新しい旅のストーリーを聞けることを楽しみにしている。



Tentsuki Place を出発する海外からのお遍路さん